あらう。併しながら吾人は徒らに想像を逞うして悲しむを要せぬ。吾人には蹈むべき道は既に示されてあるではないか。子供は動作をせずに靜止して居るものではない。子供は生の初に於て既に吾人を模倣して動作するではないか。子供は人格の模倣の萌芽期に於て、人の動作を模倣する事によつて、人と人との關係に關する實踐的知識を得るものである。子供はこれによつて、次第に、人の社會的關係、卽ち、人生その物を自家の知識の領域にとり入れて、以て人と人との社會的關係を支配する勇ましい首途の第一歩に踏み入るのである。日と共に月と共に子供は進むばかりである。其の進路に光を示して、子供の模範となり、子供の指針となるべき人は誰であらうか。嗚呼我が敬する天下の父母たる人よ、兄姉たる人よ、敎育者として深く心に思はねばならぬのは實に此處に外ならぬのである。（此の一篇は近日出版せらるべき著者の『實踐敎育上より見たる兒童の模倣』と題する著述中の一節にして、特に著者に乞うて玆に掲載したり。編者識）

『ポウル・ドンビー』（ヂッケンス）（一）

＝英文學に現はれたる子供（十九）＝

岡田みつ

これから少しヂッケンス（Dickens）の小説中の子供を御紹介します。此號のは「ドンビー・エンド・サン」といふ小説の中にあるポウルと申す男の子の事で所々を拔いて掲載致します。

ポウルは滿五歲に近くなつた。可愛らしい子ではあるが顏に何だか勢のない思ひ沈んでゐるやうな所があつて、乳母を少なからず案じさせた。ポウルは時には子供らしく戲けまはる事もあつて、

むつちりな性質といふ譯でもないが、折々少さな肱掛椅子に坐つて、いやに考へ込んで終ふ事があつた。子供部室でもよくこんな氣分になつて、姉のフローレンスと遊んでゐてさへ、あゝ疲れた！と云つて、急に默り込んでしまつたりした。併し一番よく斯樣な氣分になるのは、夕飯の後で、父の部屋へ小さい椅子が運ばれ、自分が父と一所に爐火の前に坐る時であつた。其時の二人は、余程不思議な對照をしてゐた。父のドンビー君が、身體をしやんとして威嚴めしく、火をぢつと眺めて居ると、其雛形といふ格好で、ポウルが老人見たやうな容貌をして、紅い光りに眸を凝らして思ひ入つて居た。ドンビー君が、心中に商業上の複雜た計畫やら抱負やらを描いてゐると、其の雛形は途方もない空想や捕へどころのない思案に耽つて居た。ドンビー君がしやつちこ張つて横柄な態度でゐると、その雛形は、これも又遺傳と模倣とで父そのまゝの姿勢でゐた。二人は相似る事甚しくしかも相異なる事も亦非常であつた。

或時、かやうの場合に、二人とも長い間無言でぢつとして居た事があつて、ドンビー君は、ポウルの眼に炎の光が寶玉のやうに輝いて居るのを眺めて、ポウルは未だ目を覺してゐるなと思つてゐると、ポウルが急に

「御父さん御金ッて何？」と尋ね出した。

ドンビー君は、自分の思つて居た事と直接に關係のある問が、かくも突然に出たので、面喰らつて

「御金ッて何だといふのかい。御金？」と言つた。

「えゝ。御金ッて何なの？」とポウルは言ひながら、椅子の小さな肱掛に手を載せて、年寄見たやうな顏を父に向けた。ドンビー君は困つた。賣買の媒介物、通貨、下落、金銀塊、相場、歩合等の語を使つての說明をしたかつたのだが、その小さい椅子を見下ろし、その低さをつく〴〵見て、

「金だの銀だの銅だのさ。そら、ギニー金貨、シリング銀貨・半ペンスの銅貨ね、御前知つて居る

だろう」と答へた。
「えゝ。其は知つて居るの。その事を言ふのではない。御金ッて一體何になるのッていふの。」
やれ〳〵此子の顏のませて年の寄つてゐる事！
「御金ッて一體何になる！。」といつてひた呆れに呆れたドンビー君は、こんな質問を出す生意氣の幼兒を熟と見やうと少し椅子を反らせた。
「あのね、御父さん。御金は何の役に立つの、」とボウルは言つて、腕組をして、(組む程の長さはない腕だが) 火を見ては父を見、父を見ては火を見て居た。
ドンビー君は椅子を以前の位置に戻して、子供の頭を撫でた。
「今に解るよ。御金で何でも出來るのだ」といつてボウルの小さい手を取つて、自分の手に輕く打ち當てた。ボウルは急いで父の手を振り放して、小さい椅子の肱で徐々摩ッて居た。——自分の智惠が掌にあるから、今それを研いでゐるのだといふ風に。而して火が自分の指導者で忠告者でゝもあるかのやうに、再び火を眺めて、
「何でもなるの、御父さん。」と尋ねた。
「あゝ、何でも——大抵の事は。」
「何でもッていふ事はどんな事でも皆ッて言ふ事ね。」とボウルが念を押した。
「そうさ。」
「何故御金で母さんを助ける事が出來なかつたの。御金は無情もの？」と子供は聞き返した。
「無情だ！　いゝえ。御金はよいものだもの、むごい譯はない。」とドンビー君は憤つたらしく襟飾をいぢッて直した。
「でも御金がいゝもので、何でも出來るなら」とボウルは、火を眺め入つて熟々と「どうしてそれで母さんが助からなかつたのだろう」といつたが、子供心の覺早く、父が氣を惡くしたなと知つたから、此度は父に尋ねたのではなかつた。但し其を口に出したのは、前々から考へて居て、思ひ

惱んで居る問題だからで、ポウルは頰杖をついて火に解決を求めやうと眺め入つてゐた。

ドンビー君は、驚きからやつと我に歸つて、ポウルに、御金は尊いもので、假にも惡く言ふべきものでないが、死期の來てゐる人を救ふ事は出來ないといふ事、人はどんなに金持で而して都會に住んで居ても、皆死ぬものだといふ事、又御金があると、人に敬はれ、恐れられ、ちやほやされ、着き纏はれ、偉らく貴く見えるといふ事、而して御金の力で死を長く近よらせぬ事も出來る、例へばポウルの母の病氣の時に、ピルキン先生の診察を賴む事が出來たやうなもので、其力の及ぶ範圍では、金は萬能だといふ事を說いて聞かせた。一心に聞いて居たポウルは、父の話の大要を了解したらしかつたが、暫時默つてゐた後に、

「でも僕を丈夫に達者にしてくれませんね。」といつて、小さな手を揉み合せた。

「御まへ、丈夫だろう。何處も惡くはあるまい。え？」とドンビー君が聞き返した。嗚呼、父へ向けたその顏のませてゐる事——半ば愁を含んだその怜悧い表情は！

「御前、子供相當に達者なのだらう。え？」

「姉さんは僕よりそれや年は上だけれど、僕はどうも姉さん見たやうに丈夫ぢやないの。姉さんが僕位の時には、きつと疲れないで、もつと長く遊んだでせう。僕はどうかすると大へん疲れるんだもの。」と幼いポウルは手をかざして火格子の間を眺めて、「身體の骨がもう痛くて——乳母が骨だつて言ひましたよ——どうしやうと思ふ位。」

「でも、それは夜の事だろう。」とドンビー君は言つて、椅子を擦り寄せ子供の背に輕く手を載せて「小さい人は、夜は疲れる方が宜いのだ。よく寢られるから。」

「いゝえ。夜ではないの。晝間なの。姉さんの膝に抱かつて、姉さんに唱つてもらふの。夜は僕

奇――妙――な夢を見るンです。」とポウルはいつた。

ドンビー君は、驚いて、心が不安になつて、途方に暮れて、話の續けやうがなく、唯愛兒に手を掛けたまゝ、火の光を便りにその顏を見守るのみであつた。それから、兩手で、ポウルの思ひ沈んでゐる顏を、自分の方へ向けても見たが、父が手を放すとすぐに、ポウルは火の方を向いて、やつぱりチラ〳〵搖ぐ炎を熟視して居た。

乳母が迎へに來た。

「姉さんに來てもらふの。」とポウルは言つて。

「坊ッちやま。乳母と御一所にいらつしやいませんか。」と

乳母のウイツカムが情を籠めていふと、

「いや！」と一家の主人といふ身構へでポウルは椅子に落付いてしまつた。乳母は「まあ罪もない事！」といつて引下つて、代りに姉のフローレンスが入つて來た。すると、ポウルは身輕に、活潑に坐を立つて「御休みなさい」と言ふ時今迄と違つて、余程元氣のよい若やいだ幼ない顏を見せたので、父は大きに安心すると共に、その變りを少なからず奇異に感じた。子供二人が出ていつた後に、微かに唱ふ聲が聞こえるので、ドンビー君はポウルが姉さんに唱へてもらふといつたのを思ひ出して、戸を開けて耳を澄して二人の後を見送つた。フロレンスがポウルを抱いて、大きな幅の廣い、人氣のない階段を上つて行く處であつた。弟の頭は、姉の肩に倚れ、その片腕は力なく姉の首の邊に下つてゐた。二人は大儀さうに登つていつた――姉は歌ひ續け、弟は時々弱い聲で連れ歌ひをして――。ドンビー君は二人が階段を登りきつて――中途で一休みして――見えずなるまで見送づた。それからあとも、月の鈍い光が明窓から陰氣に射し込むまで、我を忘れて上を眺めて立つて居た。

翌日、ドンビー君は晝食のあとで、家内のもの

に對つて、ポウルはどうかしては居ないか。醫師が何といつて居るかと尋ねた。

「どうも、あの子は思ふやうに丈夫でないが」と言つた。ドシビー君の妹は答へて。

「いつもの通り兄さんのお目の着けどころの偉い事。あの子はどうも申分ないといふ程の身體でありません。それといふのが、智慧の方が進み過ぎてゐるので、あの子の話す事柄と申したら實際とは思へません。ネー昨日も御葬式の話をして——」

ドンビー君は横合から疳癪聲で、

「子供部室で、子供に不相當な事を敎へるのだらう。昨夜も骨がどうとかしたつてあの子はいつてゐた。あれの骨がどうしたのです。生きた骸骨ではあるまいし。それにまた葬式だなんて誰が子供に葬式の話なんかするンです。葬式屋だの穴掘ではあるまし。」

「勿論ですよ。」

「では誰がそんな事をいつて聞かせるのです。昨夜もほんとに呆れてしまつた。誰がそんな事をいつて聞かせるのだ」とドンビー君は息卷いた。」

妹は和めるやうに、ポウルは此前の病氣以來健康が十分でなくて、時に脚に力がないやうな風が見えても、子供に通例の事であるから案じるに及ばないと言つて、

「ピルキン先生も、此間から續いて診察して下さいますが、格別言ひ立てる程の事でもないと仰つてでした。海の空氣がよかろうと、先刻御勸めになりましたが私も至極結構だと思ひました。」

「海の空氣?」とドンビー君は、妹を見た。

「えゝ。吃驚りなさる事はない。私の子供も、ポウル位の時分はやはり醫者にさういはれましたし、私も幾度も海邊へやられた事があります兄さんの仰る通り、子供部室で聞かせてよくな

い話がうつかり出るのでもありませうが、あんな怜悧な子ですから仕樣がありませぬ。普通の子だと何でもないンですが……兎に角少し此家を離れて、ブライトンあたりの海邊で、ピプチンさん見たやうな偉い人に預けたらば……。」

「ピプチンといふのは一體どういふ人です。」

ピプチン夫人といふのは、以前はよい身分の人であつたが、夫がバルー銀山で失敗した後、夫人が熱心に幼兒を研究して上手な育て方を考へ出したとかで一部の人の仲には評判のある人で、今日の名士貴婦人にもピ夫人の世話に大分なつた人があるとの說明を聞かされて、ドンビー君は、

「ではその人が學校でも立てゝ居るのかい。」

「さあ學校といつてよいかどうか分りませんがまあ極上等な幼兒保育所とでもいふのでせう。」

「では明日よく聞き訂して、もしいよ〳〵ポウルを其處へやるとしたら、誰を附けてやつたものだらう。」

「兄さん、何處へやるとしても、あの子はフローレンスと一所でなくてはいけません。それは〳〵懷ききつて居るのですから……未だ幼少いから、一時の氣まぐれでせうが……。」

ドンビー君は顏を背向けてしまつた。而して立つて本箱の方へそろ〳〵行つて、一冊本を持ち出した。

「その他には？」とドンビー君はページを繰りながら、顏を上げないで尋ねた。

「乳母は是非行かなくッては。其だけで澤山でせう。ピプチンさんの處ですからさう大勢厄介を掛けるのも……而して兄さんが、少なくも一週に一度御自分でいらしつたら。」

「勿論」といつて、あと一時間もドンビー君は一字も讀まずに同じ頁を見てゐた。

（つゞく）